第４回会議における各委員からのご意見（概要）

（議事録を基に、言い回し等を整理して作成）

【クリーンな大会について】

山下会長代行	・東京2020大会組織委員会の元理事が受託収賄容疑が逮捕された事案は、招致活動とは無関係ではあるものの、オリンピック・パラリンピック全体のイメージが大きく損なわれてしまっていると札幌市・JOCは認識している。 ・招致のプロセスは既に、簡易でコストのかからないものとなっており、現在の活動もこの考え方のもとで進めているところだが、現在の状況を踏まえると、招致活動を継続するうえで、招致決定後の大会の組織及び運営面において、透明性・公正性を確保し、改革にしっかり取り組んでいく決意を示していくことが必要と考えているところであり、秋元市長とともに宣誓文として取りまとめた。 ・宣誓文では、スポーツ庁策定のスポーツ団体ガバナンス行動等を踏まえ、対外的な説明責任を果たすための体制を整えていくために、以下の３点について検討を行うことを掲げている。 １つ目は、組織委員会理事会の規模と役割。また、役員候補者選定委員会による役員の選考等 ２つ目は、利益相反に関する考え方の明確化及び利益相反取引の管理体制の整備 ３つ目は、マーケティング事業、これにおける広告代理店の役割、意思決定のあり方等
秋元会長代行	・東京2020大会では、コロナ禍という大変な状況の中、困難を乗り越えて前へ向いて進んでいくアスリートの姿は、多くの国民に感動と勇気を与えていただいた。 ・共生社会、多様性等の社会の課題解決に向けた種も多くあったと認識している。 ・これらをさらに発展、広げていくためにも2030年大会招致を目指していきたいと考えており、現在、札幌市はJOCとともにIOCと対話を進めているところ。 ・招致成功のためには、多くの国民、地元市民をはじめとした多くの方々に支持をいただくことが大きな鍵である。 ・そのためにも、透明性・公正性がしっかりと担保された大会運営でなければならないと考えている。 ・様々な経費の問題、懸念に対して丁寧に説明をしていくと同時にクリーンな大会をしっかりと発信していかなければならない。 ・組織委員会設立後の運営ガバナンス等について、いかに透明性・公正性を担保し、国民の信頼を得ていくのかについて、JOCと共に検討を進めていきたい。
高橋委員	・オリンピック・パラリンピックを招致する我々の立場からすると、市民・道民・国民の皆様からのご理解を得るために、JOC山下会長札幌市秋元市長の両名で申し合わせをしていただいたことを大変心強く思う。 ・何より重要なのは、透明性・公正性の確保、ガバナンスの強化を具体的な形にして、皆様のご理解が進むことをしっかりやっていただきたい。
室伏顧問	・JOC及び札幌市において、今後の大会運営のあり方について透明性・公正性を確保していくための改革に取り組まれていることを表明されたことは大変重要。 ・東京2020大会組織委員会の事案が仮に事実であった場合は、フェア、公平さが求められるスポーツの世界では決して看過できるものではない。 ・スポーツ庁としては、JOC・札幌市の取組を踏まえつつ、連携強化を図っていきたい。
荒井委員	・札幌市の円山動物園では、予算が少ない中70周年の際にスタッフのウェアを更新したいという思いを当時の園長がいろいろな方に話したところ、若手経済人が中心となり、みんなでお金を集めてプレゼントしようという試みが行われた。 ・札幌や北海道の多くの皆さんは、本気で挑戦する姿勢に対しては、一生懸命応援したいという思いを持って生活しているという風に思う。 ・今回の東京2020大会組織委員会の不祥事には、一人ひとりが心を痛めながら、我々はこのようなことがない大会を2030年には実施したいという思いや円山動物園での試みのようにオリンピック・パラリンピックを応援したいという札幌市民、北海道民の気持ちをぜひご理解いただきたいと思う。 ・オリンピック・パラリンピックがどのようにこの時代に即したやり方にしていくのかということは、大変大きなテーマあであることを重々ご理解いただいたうえで、招致に勤しんでいく場でありたいと思っている。
橋本特別顧問	・元組織委員会の会長として、このたびの問題に心からお詫び申し上げたい。2030の招致活動に対して、多大なご迷惑をおかけしていることを、改めてお詫び申し上げる。 ・6月30日で組織委員会は解散しているが、様々な問題に対応するために、清算人を残して対応に努めているところ。 ・当局の捜査に対して、全面的に協力体制をとって解明をしていかなければいけない。 ・そういったことが、これから2030に向かっていく大きな力になっていくと思っている。 ・東京大会は、皆様方の大変な温かいご理解とご協力のもとで国内外からも「コロナ禍中においてもよくやった」という評価をいただいた。 ・東京大会の良かった点や課題を継承して、2030がこれからの日本、そして北海道の未来に向けて何を発信することができるかということを今一度考え、しっかりしたものをつくり上げていきたい。

【各委員発言一覧】

井本委員	**基調発言テーマ：SDGs（環境）** **【気候変動の現状】** ・この夏の世界各地の猛暑は、気候変動が取り返しのつかないところまで来ていることを私たちに突き付けている。ヨーロッパでは各地で山火事が深刻化し、多くの自然やインフラが消滅した。スポーツ界への影響も2年前のテニス全豪オープンが記憶に新しく残っている。 ・日本でも水害が頻発し、いま起こっているパキスタンの豪雨による洪水では、国土の3分の1が冠水しており、すでに1,300人以上の人が亡くなっている。 ・雪の減少も深刻で、今年の北京大会では人工雪による開催が大きな話題となったが、自然環境に頼って競技をしているウィンタースポーツやアウトドアスポーツの方々は、地球温暖化・気候変動に関する問題意識が非常に高いと感じている。 ・今年初めにはカナダのウォータールー大学から、温室効果ガスの減少が現在のままでいくと、2080年に冬季オリンピック大会が開催できる都市は札幌だけになるという研究結果が示されるなど、冬季大会の開催、ウィンタースポーツの存続が危ぶまれる状況が間近に迫っている。 ・気候変動の原因となるCO_2濃度は、既に人類の限界といわれる350PPMを超えて悪化し続けており、そのスピードは年々速くなっているといわれているが、産業革命前からの世界の平均気温上昇を1.5度以内に抑えるという世界全体の共通目標がパリ協定で定められ、これがSDGsの根核となっている。 **【世界におけるスポーツ界の脱炭素化に向けた動向】** ・SDGsとスポーツとの関係では、「持続可能な開発のための2030アジェンダ」（国連決議文）のなかで、スポーツによるSDGsへの貢献などが明記されている。 ・国連気候変動枠組UNFCCCでは、IOCと連携してSports for climate actionを発表し、具体的かつ組織的な取組を行うことを明記している。 ・昨年は、スポーツ団体の1年間の温室効果ガス排出量を全て測定したうえで、2030年までに半減、2040年までにゼロにするRace To Zero（国際キャンペーン）を発表、署名団体は現在8,000以上に上り、世界全体で大きな枠組みができつつある。 ・IOCでもサステナビリティ戦略として、主にインフラや競技場建設のCO_2削減、グッズの製造から販売まで全ての調達プロセスにおけるCO_2削減、連盟・チーム関係者の移動制限、観客も公共交通機関や徒歩で観戦に行くことを推奨するなど、気候変動に対する対策が定められている。 ・その他、FIFAやUEFA、MLBなど、まさに世界中が脱炭素化に向けて動き出している。 **【日本における取組と2030年大会】** ・アメリカで立ち上がったPROTECT OUR WINTERSというNGO団体の日本支部が、長野県白馬村にある。 ・市民やスキー場、関係企業が一緒になり、大きな力を持って行政を動かし、シンポジウムの開催や気候非常事態宣言に至るまで、画期的な取組が誕生している。 ・この活動は、ニセコでも活発になり始めていると伺っており、スノーコミュニティーを中心とした動きは、今回の大会招致や招致された場合の準備段階でも参考になる。 ・また、前回の慶応大学の学生からの基調発言が心に残っており、アスリートたちが挑戦しているように、市民一人ひとりが自分たちの使命を見つけて挑戦し、世界に貢献するという実感が持てる大会にするべき。 ・オリンピック・パラリンピックに向かって、気候変動という共通目標に対するチームが結成され、競い合うような形で関わっていける仕組みができると良いのではないか。 ・具体的には、3つの取組が上げられる。 ・まず、先程の白馬村のように、市民と冬のスポーツ産業、関連企業、地域コミュニティが一緒になり、行政を巻き込んで、まちづくりを行っていく取組。 ・次に、スポーツ界として、組織的なCO_2削減に向け、Sports for climate actionに賛同し、世界と一緒にこの気候変動対策に関わっていくという意思表明を行い、アスリートたちが多くの人たちを巻き込みながら、意識改革を促していく取組。 ・最後に、パリ大会が目指しているゼロではなくプラス・カーボン、そして2030年には次のSDGsを見据えた新しい形を提示する大会を目指す取組。 ・こういった取組をすべて総合し、北海道全体、そして日本全体を巻き込んで、気候変動を前に進めていけるような、そういった大会になれば良い。

芦立委員	**情報提供：「スポーツを通じたSDGsマネジメント手法に対するガイドブック」について** ・JSC とSwiss Academy for Developmentによる共同開発で、ユネスコ、IOC、IPC（アギトス財団、ローレウス・スポーツ・フォー・グッド財団）、 イギリス連邦52カ国で構成されるコモンウェルス事務局も参加し作成をしたもの。 ・ポイントは、スポーツとSDGsを具体的にどう適用していくかということ。 ・SDGsをスポーツに関して具体的に進めていくため、以下の国際的な政策計画の枠組みを通じて、17目標の下に様々な機関がそれぞれの専門的立場から目標を掲げている。 ・第6回スポーツ大臣会合で採択された「カザン行動計画」 ・WHOによる「身体活動に関する世界行動計画」 ・国連では、開発と平和のためのスポーツ ・これらを全てクリアしていくことがこれからの大会には非常に重要だが、全て読み込んでチェックしていくのは大変なため、関係機関の協力を得てガイドブックを作成した。 ・このガイドブックは、8月22日に世界で公開したが、その際にコモンウェルス事務局から、大会主催者や関係者にとって有意義な取組であり、環境の持続可能性や あらゆる場所でジェンダー問題を取り上げていく、あるいは障がいのある方のインクルージョンなど、様々なテーマで活用できるチェックリストとして 使っていくべきではないか、という話をいただいた。 ・それぞれテーマごとにチェックすべき点を全て具体的に書き込んでおり、このチェックリストに当てはめることで、大会そのものが国連やWHO、 スポーツ大臣会合でいわれている課題をクリアしているかどうかを説明していくことができる。 ・今回の札幌の招致計画もこのチェックリストを十分クリアできるような内容が非常に多くなっていると思うので、このチェックリストを示していくことで、 世界的に札幌大会がSDGsをクリアしたしっかりとした大会になるという説明が非常に容易になる。 ・陥りやすい落とし穴などについても言及しており、チャートで順番に見ていけば、半ば自動的にチェックが効く仕組みとなっている。 ・このハンドブックを活用することで、スピーディーかつグローバルな視点で、大会の計画がうまく進んでいることを示すことができる。
狩野委員	・2010年頃から毎年通っていたヨーロッパの氷河のスキー場のコース脇にあった５メートル近い氷河が3、4年後には融けてすべてなくなってしまうような現状等、大きく様変わりしてきたのを目の当たりにしてきた。 ・色々な方法でゼロカーボンを実現すると思うが、スポーツの舞台でできることで、社会的に影響を及ぼし、オリパラを使ってしっかりと北海道・札幌からゼロカーボン社会を作ることができればすごくうれしい。改めてこの課題については積極的に取り組んでいきたいと行きたいと思うと同時に、より具体的な案を検討していきたいと考える。
山下会長代行	・前々から気候変動、地球温暖化、環境破壊に関して関心を持っている。 ・スポーツに関わる人たちがこれらの問題に対する認識をしっかり持ち、行動を変えていくことで、社会に与える影響はかなりあると思っている。 ・今後、どれくらいの人類が地球上に生存していけるのか、大人の役割として子どもに何を残していくかを考えたときに、スポーツをする人、見る人、支える人を含めてスポーツ界が行動を起こし、便利・快適を求めることをやめるということは、ポジティブなインパクトを与えることになると思っている。 ・JOCでは昨年（2021年）「JOC　Vision　2064」を作り、３つの柱の一つがスポーツを通して社会課題の解決に貢献としており、これを柱に掲げる以上は、しっかりと責任をもって取り組んでいく。 ・色々な関係団体が、そのような意識を持って多くの人を巻き込み、2030年大会招致が決まった時には覚悟を持って取り組んでいく姿勢を示すことは絶対に必要。
河合委員	・芦立委員がご紹介されたガイドブックは、様々な国際的な機関にも確認をしながら作成されている点からも、ガイドブックを大会に適用していくことによりSDG s に対して理解をいただく有効なツールになり得る。 ・気候変動や環境問題、共生社会等、問題意識を持っている方は多いが、市民・道民・国民に具体的なアクションをしてもらえるようにしていく点で課題があり、具体的なアクションを日常化していくことにより、達成し得る目標であると思うので、我々も目標達成に向けた具体策を検討し、提案していくことが求められると思う。 ・共生社会バリアフリーシンポジウムに登壇した際に、旅館などのバリアフリー化に対する補助金には15年、20年前にはなかなか手が上がらなかったが、ある旅館がバリアフリー化したところ、お客さんが30倍に増えた事例を紹介した。10年20年の間に車いすの方が１人、２人しか泊まらなかったため必要ない判断していた改修であったが、潜在的なニーズを確認できたという事例であった。 ・冬の雪まつり以外の時期に札幌への来客がなかなかないという話があったが、冬を楽しみたいという方々も潜在的にいることから、車いすの方や視覚障がい者の方々等のバリアフリーやアクセシビリティを高めることを今後、提案できるような取組や計画を検討していけると良いと感じた。

荒井委員	・河合委員に札幌市内の小学校で３年生～５年生に対して、「I'm possible」共生社会の授業をしていただいたが、児童全員の目が輝きたくさん手を挙げて質問しており、子どもたちに対して大変インパクトがあったと思う。 ・その光景を見て、スポーツ選手が持っている発信力や頑張っている姿が若い人たちにものすごく大きな影響を与えると感じた。 ・狩野委員の氷河が融けるお話にもあったように、我々が普通に生活していても見えてこなかった世界観をスポーツ選手は見てきており、それを発信し、若い人が受け止めるということを、2030年大会の招致後の８年間で北海道・札幌でアスリートの皆さんが授業等を展開していただけると、大きな行動変容に繋がっていくと改めて思った。
伊達委員	・スポーツの活動と気候変動が非常に密接であると分かった。 ・特に冬のスポーツは温暖化の影響もあり、2080年にオリンピックを開催できる都市は札幌だけであることもセンセーショナルな事実であった。 ・オリンピックの招致・開催を通じて、気候変動に対して取り組むことの宣言につなげていくことにより、メッセージ性につながっていくと考える。 ・芦立委員がご紹介された手法もわかりやすい良い方法だと考えるが、一方で国内のSDGｓに対する認識が海外と落差があることが資料に記載されていた。オリンピックの招致活動及び招致成功後の開催後のプロセスの中で、気候変動に対して取り組んでいくことができれば、世界の中での日本、北海道、札幌の現在の意識、現在地の理解を通じて、どのように変えていくのかということまでのプロセス・プログラムを組むことができると思う。 ・そのこと自体が我々が求めている札幌市民が、オリンピックを通じて自分ゴトとして何をしていくのかに繋がっていくという風に感じた。
菅谷委員	・ゼロカーボンに関するお話をいただき、冬季オリンピック・パラリンピックは特に自然と共に成功していく事業であることを改めて実感し、自分自身も真剣に取り組んでいかなければならないと勉強させていただいた。 ・芦立委員がご紹介されたチェックリストも一人一人が自分ゴトとして行動できる指標になるのではないかと感じた。 ・まちづくりの観点では、2030年大会をきっかけにSDGｓの推進、社会問題の解決に向けた活動が加速し、経済発展やより暮らしやすいまちづくりが一段と進むことに期待している。 ・ANAあきんどでは、札幌市とANAと共に2030年大会招致を契機とした共生社会実現に向けて、「Universal MaaS」の共同プロジェクトを開始した。9/4（日）には車いすの街歩きイベントとして「WeeLog！街歩きイベントin札幌」を開催し、実際に車いすに乗って街にあるバリアフリーの現状等をチェックした。牧野委員や永瀬委員にもご参加いただき多数の貴重なご意見もいただいたので、改善に繋げていただけたらと考えている。 ・このような取組が、オリンピック・パラリンピック大会を契機として将来を見据えたまちづくりに繋がるイベントになるのではないかと思う。世界の先端を行くことを見せることで、オリンピック・パラリンピックの招致機運醸成にも繋がると考えているので、このような取組を強めていきたい。 ・経済界では、経団連が近々札幌市を訪問し、前回の札幌オリンピック関連施設等の視察を検討していると伺っている。企業や業種等の垣根を超えた連携、機運醸成に努めることも大切だと思っている。
牧野委員	・スポーツとSDGｓの関係がいまいちよくわかっていないところがあったが、井本委員の基調発言を聞き、密接な関係があることを理解した。 ・SDGｓの17の目標は全てにつながっていると実感し、まちづくりやオリンピック・パラリンピックと全て密接な関りがあり、社会問題を一つ一つ解決していくことがSDGｓに繋がっていると実感した。 ・芦立委員がご紹介された資料もとても貴重なものだと実感し、是非これを活用し色々なことに繋げていけると良いと感じた。 ・菅谷委員の発言にあった「WeeLog！街歩きイベントin札幌」に参加したが、一緒にいたメンバーの中に初めて車いすに乗ったという大学生がいた。IT関係の技術を専攻している学生であったが、一つ一つに関心を持っていただき、初めて知ったことがたくさんあったと感想をくれた。 ・知らないことが無理解につながっていくとこれまでも発言しているが、2030年大会招致、開催を通して「知っていただく機会」を市民の皆様に是非進めていただきたい。 ・井本委員の基調発言の中で「市民一人一人が自らの使命を見つけ挑戦する力をアスリートの挑戦を通じてエンパワーし、自分が世界に貢献できる、実感が持てる大会」という言葉がすごく印象的で自分一人一人の意識が大切だと感じた。
森副会長	・SDGｓ、気候変動に関する基調発言をいただいたが、これまで共生社会、レガシーをテーマに議論してきた中で、これらは全ての社会課題に対する解決策の議論だと感じている。 ・社会課題の解決は、一人だけではできず、多くの方々がそこに自分の意志を持って参加することが一番効果的であり、そのための場所や機会をいかに提供していくかということが我々が議論している先にあるものだと感じた。 ・これからの社会を担う子どもたちも重要なターゲットとして認識しながら、一人一人の市民が参加しやすいような建付けを準備していく。 ・2030年までの８年間を、社会課題解決のテーマにスポーツを軸に置きながら時間を使うことができればすばらしい８年間になる可能性がある。 ・まずは招致プロモーションを成功させ、８年間を得られれば皆様が議論してくださっているような、色々な社会課題解決のテーマを切り口にして、北海道・札幌が先行して取り組んでいけることができれば、本当にスポーツの価値を改めて感じることができると実感している。